



# ココガ 働ク バシヨ!

知的障害がある生徒の職場実習・就業事例集



発行：横浜市教育委員会



### 目 次

<b>I 横浜市の特例支援学校について</b> .....	<b>1</b>
<b>II 卒業生の実習・雇用事例の紹介</b> .....	<b>3</b>
Office 1 富士木材(株)横浜工場/三浦真明さん(平成18年度日野中央高等特別支援学校卒業) .....	3
Office 2 (株)パルタック横浜支社 RDC横浜/小泉友和さん(平成18年度日野中央高等特別支援学校卒業) .....	4
Office 3 八重洲富士屋ホテル/丹藤 憲さん(平成16年度日野中央高等特別支援学校卒業) .....	5
Office 4 (株)サンエー・インターナショナル/木村友紀さん(平成18年度二つ橋高等特別支援学校卒業) .....	6
Office 5 (株)勝烈庵/荒川桂太さん(平成17年度日野中央高等特別支援学校卒業) .....	7
Office 6 (株)ガトーよこはま/齊須美帆さん・杉橋彩子さん(平成15・16年度日野中央高等特別支援学校卒業) .....	8
Office 7 (有)AGCサンスマイル/近藤恭平さん(平成18年度日野中央高等特別支援学校卒業) .....	9
Office 8 アピタ長津田店(ユニー株)/田中 純さん(平成18年度二つ橋高等特別支援学校卒業) .....	10
Office 9 (福)久遠園第二福澤保育センター/小出季美香さん(平成17年度日野中央高等特別支援学校卒業) .....	11
Office10 ワタミダイレクトフランチャイズシステムズ(株)/藤田尚幸さん(平成18年度二つ橋高等特別支援学校卒業) .....	12
Office11 スターバックスコーヒージャパン(株)湘南台駅ビル店/阿部健太郎さん(平成18年度日野中央高等特別支援学校卒業) .....	13
Office12 ふれあいショップ マーブル/石川 学さん(平成16年度本郷特別支援学校卒業) .....	15
Office13 (株)本牧館/石黒 緑さん(平成18年度本郷特別支援学校卒業) .....	16
Office14 日清オイリオ・ビジネススタッフ(株)/豊原久志さん(平成19年度港南台ひの特例支援学校卒業) .....	17
<b>III 雇用現場からのメッセージ</b> .....	<b>18</b>
Message1 (株)ファンケルスマイル/会長 浅井輝生さん・指導員 長瀬誠さん .....	18
Message2 富士ソフト企画(株)/元社長 早津宗彦さん .....	19

この冊子では、横浜市立高等特別支援学校卒業生の実習・雇用事例の紹介と、障害者を雇用する企業現場からのメッセージを中心に、障害者雇用の具体例をご紹介します。

実際の障害者雇用の現場では、決してここに紹介するような良好な事例ばかりではないと思いますが、現場で働く障害者と受け入れる企業の、ひとつの現実の姿が、間違いなくここにはあると思っております。

ここにご紹介する各事例が、障害者雇用への理解を深める一助になっていただければ幸いです。

また、この冊子の製作に関し、快く取材にご協力いただいた企業・保護者の皆様、そして卒業生の皆様に、心より感謝申し上げます。



# I 横浜市の特別支援学校について

## 1 横浜市内の特別支援学校の概況

横浜市内には、県立7校、市立12校、国立1校、私立2校、計22校の特別支援学校があります。その中で、知的障害者を対象とする市立特別支援学校が4校あります。

＜参考：横浜市立の特別支援学校＞ ※太字が知的障害特別支援学校

対象障害種	学 校 名	特 色	所 在 地
知的障害	日野中央高等特別支援学校	■高等部のみの学校 ■知的障害が軽い生徒を対象 ■企業への就職100%をめざす	港南区日野中央 2-25-3
	二つ橋高等特別支援学校		瀬谷区二ツ橋町 4 7 0
	港南台ひの特別支援学校	■小・中学部、高等部で構成 ■中・重度障害の児童生徒が中心 ■企業への就職はほとんどない	港南区港南台 5-3-2
	本郷特別支援学校		栄区小菅ヶ谷 3-37-12
肢体不自由	上菅田特別支援学校	■小・中学部、高等部で構成 ■肢体不自由のみの障害や重複障害の児童生徒を対象 ■企業への就職はほとんどいない	保土ヶ谷区上菅田町 462
	中村特別支援学校	■小・中学部で構成	南区中村町 4-269-1
	北綱島特別支援学校	■各校に上菅田特別支援学校高等部の分教室あり	港北区綱島西 5-14-54
	新治特別支援学校	■大部分の児童生徒に重度重複障害がある	緑区新治町 7 6 8
視覚障害	東俣野特別支援学校	■企業への就職はいない	戸塚区東俣野町 1103-1
	盲特別支援学校	■幼稚部、小・中学部、高等部（本科、専攻科）で構成 ■卒業生の半数程度が就職	神奈川区松見町 1-26
聴覚障害	ろう特別支援学校	■幼稚部、小・中学部、高等部（普通科、生産流通科）で構成 ■卒業生の半数程度が就職	保土ヶ谷区常盤台 81-1
病 弱	浦舟特別支援学校	■小・中学部で構成 ■児童生徒は市内4カ所の病院に入院しながら授業を受ける（院内学級）	南区浦舟町 3-46 浦舟複合施設 11階

これら4校のうち日野中央高等特別支援学校と二つ橋高等特別支援学校は、比較的知的障害が軽い生徒の高等部のみの学校となっており、一般企業への就労をめざす職業教育を進めています。実際2校の就職率は高く、例年8～9割の生徒が一般企業に就職しています。

また、港南台ひの特別支援学校と本郷特別支援学校は、中～重度の知的障害のある児童生徒が多く、一般企業へ就職する生徒は極めて少数であるというのが現状です。

横浜市教育委員会では現在、これらの4校を対象とした「就労支援事業」を進めており、障害者雇用の専門家（就業コンサルタント）による企業の開拓や、啓発活動等を行っています。

この冊子では、主に一般企業への就業率が高い2校の高等特別支援学校の事例を取り上げていますが、一方で、数は少ないながらも、本郷特別支援学校、港南台ひの特別支援学校を卒業し、社会の中で自立を果たしている方たちの事例も紹介しています。

## 2 高等特別支援学校の職場実習について

2校の高等特別支援学校の生徒は、在校時に様々な企業での体験実習・試験実習を経験し、就職をしていきます。

学校では、企業における実習を、生徒が多くの人と出会い社会的自立心を高めていくための重要な教育カリキュラムとして位置づけています。

そのため、実習の受入が可能な企業を、幅広く求めています。

[参考：高等特別支援学校の年間実習期間予定]

月	1年生	2年生		3年生	
	二つ橋	日野中央	二つ橋	日野中央	二つ橋
4					
5			体験実習 期間：1週間	体験実習 期間：4週間	体験実習 期間：4週間
6					
7					
8					
9					
10	体験実習 期間：1週間	体験実習 (グループ実習) 期間：1週間	体験実習 期間：2週間	試験実習 期間：3週間	試験実習 期間：4週間
11					
12					
1		体験実習 期間：1週間		追実習 (必要に応じて)	
2					
3					

### 【お問い合わせ・連絡先】

- 具体的な実習受入等に関する相談・調整／実習全般に関する質問等  
横浜市立日野中央高等特別支援学校  
電話 045(844)3015 FAX 045(846)8448  
横浜市立二つ橋高等特別支援学校  
電話 045(391)2131 FAX 045(391)2193
- 障害者雇用全般に関するご相談／就業コンサルタント・当冊子に関するご質問等  
横浜市教育委員会事務局特別支援教育課（担当：山口）  
電話 045(671)3958 FAX 045(663)1831



## Ⅱ 卒業生の実習・雇用事例の紹介

<b>Office 1</b> <a href="http://www.ipac-fujimoku.co.jp/">http://www.ipac-fujimoku.co.jp/</a>		<b>業種</b> 富士フィルム製梱包資材の製作・梱包
<b>富士木材（株）横浜工場</b>		<b>所在地</b> 横浜市金沢区富岡東2-2-28
みうら <b>三浦</b>	まさあき <b>真明さん</b>	<b>従業員数</b> 35名
平成18年度 日野中央高等特別支援学校（高等養護学校）卒業		<b>障害者雇用状況</b> 1名

富士木材（株）横浜工場は本社木材部の拠点工場のひとつで、主に富士フィルム製品の出荷・輸送用の梱包資材等を製作しています。

三浦さんは、平成19年4月に就職し、木材の加工・組み立て作業を中心とした仕事をしています。

### 三浦さん採用までの経緯

三浦さん採用の経緯について、工場長の松田昌樹さんは言います。

「2年前に新聞に求人広告を載せました。それを見て17～8人の老若男女（健常者）が応募してきました。学校から三浦くんの実習依頼があったのは、この時期と前後してのことでした」。

そして松田さんは、三浦さんを含む応募者全員と面接を行いました。その時のことを振り返って松田さんは、「三浦くんを特別な目では見ませんでした。全員を同じ判断基準で面接した中で、一番輝いていたのが三浦くんだったにすぎません」と言います。

松田さんは三浦さんを採用した理由について、「仕事ができるかどうかは二の次です。三浦くんの場合は、仕事に対する考え方や姿勢がとても前向きでした。『この会社で頑張りたい』という気持ちが、他の誰よりも強く伝わってきたので採用しました」と言います。

その後三浦さんは、平成18年6月に4週間、10月に3週間、そして平成19年1月に3週間の職場実習を経て、平成19年4月から正式採用となりました。



「パレット」を作成する三浦さん

### 三浦さんの仕事

取材の日三浦さんは、製品を載せるための「パレット」という木製の荷台を作っていました。作業はすべて三浦さんが一人で行っており、手際よく作業が進んでいきます。

松田さんは、「だいたいことはもう任せていますが、まだまだ半人前です。与えられた仕事はきちんとこなせますが、これからは自分で考えて判断して仕事をしていくことが大切です」と言います。

一方三浦さんは、仕事を一人で任されていることについて、「就職してから1年の間に、すごく責任感が芽生えました」と言います。

### 職場での三浦さん

職場の雰囲気も和やかで、三浦さんは先輩たちからかわいがられているそうです。松田さんは、「私たちは三浦君のことを障害者だと思っはいません。仮にこの職場で、『障害者』という目で彼を見る人間がいたとしたら、その人には当社を辞めていただくことになるでしょう」と言います。

こう語る松田さんのもとには、最近、特別支援学校などからの実習依頼が増えてきているそうです。しかし、松田さんは言います。

「実習を受けても、すべての人を採用することはできません。自分には人間をモノのように扱うことはできないので、辛いですね」。

\* \* \* \* \*

三浦さんは、「今は仕事で精一杯ですが、少し余裕ができれば自動車の運転免許を取りたいです」と、目を輝かせます。



株式会社パルタックは、大阪市に本社を置く化粧品・日用品および一般用医薬品卸のトップ企業です。「RDC」とは、パルタックが扱う商品の供給・返品等、小売店へのサービス提供の拠点となる大規模物流センターのことで、横浜のほか全国16カ所に所在しています。

ここは膨大な数の商品を保管する倉庫機能を有しており、小泉さんは主に倉庫内での商品の仕分け・梱包といった業務を行っています。

### 小泉さん採用までの経緯

センター長・木村茂樹さんの話によると、きっかけは学校からの職場実習依頼の電話だったそうです。日野中央高等特別支援学校では、生徒の就職を進めるため、様々な企業に在校生の職場実習をお願いしており、教職員が各種の求人情報やインターネット等を活用して、随時企業にアプローチしています。しかし断られるケースの方が圧倒的に多く、実習受入がなかなか進まないのも現実です。

しかし株式会社パルタックでは、本社が障害者雇用に積極的な考えを持っていたため、まずは実習で小泉さんを見てみようということになったそうです。



入念な商品チェック

### 小泉さんの仕事

小泉さんの最初の実習は、平成18年10月からの3週間でした。「思った以上に仕事ができ驚いた」というのが木村さんの印象だったそうです。また、「まじめで黙々と仕事をこなすタイプなので、集中力と細かさが要求されるここでの仕事がマッチするのではないか?」とも考えたそうです。その後小泉さんは、平成19年1月にも3週間の実習を行い、同年4月に正式採用となりました。

小泉さんは今では商品の仕分けや梱包、パソコンでのラベル作成等様々な業務をひとりでこなしていますが、最初の仕事はダンボールの組み立てだけだったそうです。木村さんは、「単純な仕事で自信や達成感、満足感を感じてもらい、徐々にメニューを増やしいろいろな仕事を覚えてもらいました。無理をせず丁寧に指導すれば、きちんと覚えてくれます」と言います。

また最近、朝から同僚がみんな出払ってしまい、小泉さんが持ち場で一人きりになってしまったことがあったそうですが、そのとき、すべての仕事の下準備を一人きりで整えたことがあったそうです。木村さんは、「あれには驚きました。いつの間に覚えたのでしょうかねえ?」と笑っていました。小泉さん自身、「教えてもらわなくても自分でやり方を覚えたことが嬉しい」と言っており、大きな自信につながったようです。



仕訳した商品を運搬

### 企業の一員として

木村さんは言います。「小泉君の障害は意識していません。立派な戦力として働いてもらっていますから」。そして小泉さんに対して、「若干引っ込み思案のように思えます。もう少し自己アピールをしてもよいのでは?」と言います。物静かでまじめな面は小泉さんの個性であり長所でもあるのかもしれませんが、でも木村さんのこの言葉の中には、「一人前の仕事をしているのだから、もっと自信を持って大丈夫」という激励の気持ちが込められているように思えます。

\* \* \* \* \*

小泉さんの勤務時間は9時から5時までですが、毎朝必ず30分前には出勤しているそうです。学生時代に比べ自由な時間は大幅に減ってしまいましたが、仕事は楽しいと言います。今一番やりたいことは「電車に乗っていろいろな駅でおりて、いろいろな場所を見て回ること」だそうです。



# 八重洲富士屋ホテル

たんとう けん  
**丹藤 憲さん**

平成16年度 日野中央高等特別支援学校（高等養護学校）卒業

**業種** ホテル  
**所在地** 東京都中央区八重洲2-9-1  
**従業員数** 女性43名/男性92名  
**障害者雇用状況** チェーン11事業所で20名  
(内部障害3名/聴覚障害4名/知的障害5名/視覚障害2名  
肢体不自由4名/下肢障害1名/精神障害1名)

八重洲富士屋ホテルは東京駅八重洲南口から徒歩5分のシティホテルです。丹藤さんは平成17年4月に入社。総務課購買係で働いています。

八重洲富士屋ホテルを運営している富士屋ホテル（株）では、11事業所で計20名の障害者を雇用していますが（平成20年3月15日現在）、八重洲富士屋ホテルとしては丹藤さんがはじめての雇用となります。

## 丹藤さん採用までの経緯

丹藤さんの上司である総務課長の古賀正道さんは言います。「きっかけは学校からの実習依頼の電話でした。本社が障害者雇用に前向きな考えだったので受け入れることにしました」。丹藤さんは、平成16年5月から計3回このホテルでの実習を行い、平成17年4月に正式採用となりました。古賀さんは丹藤さんの採用の決め手について、「記憶力の良さと飲み込みの早さに加えて、明るくて周囲の人から好かれる人物だったことです」と言います。



## 丹藤さんの仕事

丹藤さんの職場である総務課は、フロント横の扉を隔てたすぐ裏側にあります。八重洲富士屋ホテルは外観・内観ともとてもきれいで都会的ですが、総務課などの事務セクションは、対照的に狭く雑然とした空間になっています。



落ち着いたあるフロント



慣れた手つきでパソコンを操る丹藤さん

古賀さんは言います。「建物・敷地の大部分のスペースをお客様に提供するのがホテルという施設なんです。だから従業員のためのスペースというのは極めて狭いんです」。

丹藤さんは主にこの総務課内の自席で、パソコンによる棚卸しの入力作業を行ったり、搬出入車が乗り入れるホテル裏側の検品室で、仕入れ品の検品、伝票発行等の業務を行っています。

検品室には、多種多様な消耗品や珍しい食材等が頻繁に搬入されるため、「野菜の種類や調味料の種類を覚えるのが大変です」と丹藤さんは言います。

## 職場の丹藤さん

古賀さんは丹藤さんへの仕事の指導について、「確かに苦手な分野もあります。しかし得意なこともたくさんあります。それを見極めて時間をかけてきちんと指導し、少しずつ難度の高い業務に挑戦してもらっています。そうすれば、どんどん成長してくれます」と言います。そして現に丹藤さんは今、このホテルの立派な戦力となっているとのこと。

\* \* \* \* \*

丹藤さんは、その明るい性格から職場の人気者だそうです。職場では先輩社員から矢継ぎ早にツッコミを入れられ、調理部門や仕入れ先の人たちからは弟のように親しまれ、「うちの職場で働かないか？」などと声をかけられることもしばしばあるそうです。

ホテルは、バックヤードのこうした明るい雰囲気があるからこそ、利用者に安らぎや楽しさを与え続けられるのかもしれませんが、丹藤さんはそういう意味でも、欠かせない存在になっているのかもしれない。



検品室で納入業者への対応

(株) サンエー・インターナショナルは、服飾雑貨の企画・製造・販売や、ライセンスブランド事業の展開、セレクト編集型ショップ・アウトレットショップの運営等を行っています。

同社では、欠陥商品等を各店舗から回収し、その原因を探り品質向上を図る等を目的とし、品川区に「B品管理センター」を設置しています。

回収された商品はここで詳しく調べた後、修復してアウトレット商品にしたり、工場へ返品するなどしています。木村さんはここで主に、商品をきれいにたたんで袋詰めする仕事をしています。

### B品管理センターについて

B品管理センターで働く20名（他パート6名）の従業員のうち、18名には障害があります。本社人事部の三浦富士子さんはそのことについて、「ここでの業務は、入荷チェックやパソコン処理、商品管理などが中心なので、障害のある方でも十分力を発揮していただけるはずであるという考えから、障害のある方を中心に働いていただいています」と言います。B品管理センターは、決して障害者を雇用することを目的として設置されたわけではありませんが、業務の性質上、自然な流れで障害者中心の職場となっていくというわけです。

これは企業側が、『障害があっても働ける職域』というものをしっかりと考え続けた結果であるとも言えるのではないのでしょうか。 ※サンエー・インターナショナルには、サンエー・ロジティクスという特例子会社もあります。



### 木村さん採用までの経緯

B品管理センターでは18名の障害者が働いていますが、新卒での採用は木村さんがはじめてだそうです。木村さんは平成18年の春から特例子会社を含め計3回の実習を行い、平成19年春に採用になりました。

採用までの経緯について人事部の三浦さんは、「本人がまじめで一生懸命だったことと、担任の先生が非常に熱心で何回も足を運んでくれたことが、初の新卒採用につながりました」と言います。

### 職場での木村さん

木村さんの通勤時間は片道で1時間30分以上かかるそうです。勤務時間は朝9時30分から夕方6時30分までなので、帰宅は每晚8時を過ぎます。木村さんは「通勤は辛くありません。慣れたので大丈夫です」、「ぜひこの仕事を続けていきたいです」と言います。

職場の先輩である酒巻さんは木村さんのことを「まじめで仕事も丁寧なので、ぜひずっと続けてほしいです。今後は違う仕事にもチャレンジして欲しいので、新しいものにも目を向けてほしいですね」と言います。

また、「木村さんの周りは年上ばかりなので、皆一生懸命木村さんの面倒を見ようとしています。そうしたことが、周りの社員のスキルアップにもつながっていると思います」とも言います。

\* \* \* \* \*

### 酒巻さんから指導を受ける木村さん



人事部の三浦さんは言います。「サンエー・インターナショナルは、商品を売るだけが目的の会社ではありません。ファッションを通じて多くの人に、『新しい自分』『可能性』『夢』などを見つけてほしいのです」。

普段は無口でおとなしい木村さんですが、就職してからは家族とファッションの話でしばしば盛り上がるそうです。また、外出時はサンエー・インターナショナルブランドの服を身につけ、最近ちょっとおしゃれになってきたようです。

木村さんも、なにかを見つけたのかもかもしれません。



(株) 勝烈庵

あらかわ

けいた

荒川 桂太さん

平成17年度 日野中央高等特別支援学校(高等養護学校)卒業

業種 飲食業/かつれつ料理専門店

所在地 横浜市中区常盤町5-58-2

従業員数 133名(男性39名/女性94名)

障害者雇用状況 1名

勝烈庵は、昭和2年創業のかつれつ料理専門店の老舗です。荒川さんは、その馬車道総本店で働いています。荒川さんの仕事は主に作業所及び厨房内での食材の仕込み(下ごしらえ)となっています。

### 荒川さん採用までの経緯

荒川さん採用までの経緯について、取締役総務部長の西村真吾さんは、「従前から障害者の雇用を検討していました。しかし、どのような仕事をしてもらったらいいかわからず、今一步踏み出せないでいました。そんなとき学校から職場実習依頼の電話があり、勉強させてもらうつもりで実習を受け入れました」と言います。

その後荒川さんは、平成17年6月に4週間、10月に3週間、そして平成18年1月に3週間の実習を行いました。真剣で前向きな姿勢と穏やかでやさしい性格が評価され、平成18年の4月に採用となりました。

もともと料理に強い関心があり、「将来は独立したい」という気持ちもある荒川さんにとっては、夢に一歩近づいた瞬間だったようです。



店舗外観



肉の下ごしらえをする荒川さん

### 職場での荒川さん

荒川さんは、ヒレ肉のバラシ、海老の造り、鶏卵割りといった下ごしらえのほか、サラダや鳥のくわ焼きなどの調理も行っています。

荒川さんは自分の仕事について、「下ごしらえの肉をきれいな形に整えるのが難しいです。もっと早く作業ができるようになって、少しでも仕事を任せてもらえるようになりたいです」と言います。

荒川さんを指導する調理課長の向山治むこやまさんはそれに対して、「正直言ってまだまだ半人前です。今はあせらず基本をひとつひとつ身につけて欲しい」と言います。しかしその一方、

「非常に前向きに仕事に取り組んでいます。勝烈庵には、多くの若者が職を求めてやって来ますが、いい加減な気持ちの人はすぐにやめてしまいます。そういう人たちに比べたら、彼のまじめさや熱心さは、大変高く評価できます」とも言います。

### 小さな目標設定から…

勝烈庵では荒川さんに対して、一連の仕事の中に小さな達成目標を数多く作ることで、達成感をこまめに感じてもらうような工夫をしているそうです。「日々の努力が結果に結びつく」ということを荒川さん自身が日常的に実感することで、仕事での成長も著しいものになっているとのことです。

向山さんは、「この道で一人前になるのは並大抵ではありません。荒川君もまだ先は長いので、ゆっくり確実に仕事を自分のものにしてほしいと思います。何年かかるかわかりませんが、それまでは私が面倒みますから」と笑います。

\* \* \* \* \*

料理職人にとって包丁は命といいますが、最近、荒川さんも自分の包丁が欲しくなったようで、先だって向山さん行きつけの築地のお店まで、従業員みんなと買いに行ったそうです。

自分の包丁を手にした荒川さんは、以前にも増して熱い思いで仕事に打ち込んでいるようです。



向山さんから指導を受ける荒川さん

Office6 <a href="http://www.gateau-yokohama.co.jp">http://www.gateau-yokohama.co.jp</a>		<b>業種</b> 洋菓子製造販売（チーズケーキ専門店）
<b>(株) ガトーよこはま</b>		<b>所在地</b> 横浜市神奈川区栄町89-19
さいず <b>齊須</b>	みほ <b>美帆さん</b>	<b>従業員数</b> 17名（本店）
すきはし <b>杉橋</b>	あやこ <b>彩子さん</b>	<b>障害者雇用状況</b> 2名（本店）
平成15年度・平成16年度 日野中央高等特別支援学校（高等養護学校）卒業		



ガトーよこはまは、横浜市内に8カ所の店舗を持つチーズケーキ専門店です。本店は横浜中央卸売市場の程近くの「ポートサイド地区」と呼ばれる場所にありま。齊須さんと杉橋さんは、ここで主にケーキの製造補助の仕事をしています。

### 採用までの経緯

ガトーよこはまでは、2年連続で齊須さんと杉橋さんという2人の卒業生を採用しています。全従業員数17名のうち障害者を2名受け入れるというのは非常に珍しいケースであると言えますが、製造部長の小山正治さんは、「え？珍しいんですか？」と不思議そうな

表情を浮かべます。

学校は企業側の負担等を配慮し、原則として同じ企業に対し2年連続の試験実習（採用を前提とした実習）の依頼はしていません。この2人の場合も、1年後輩である杉橋さんは、別の企業への就職がほぼ決まっていた。しかし、企業側の都合により直前で取りやめになってしまい、急遽他の就労先を確保する必要が生じました。

学校内では杉橋さんの進路について改めて検討を行いました。かねてよりガトーよこはまから、「齊須さんのように良い人がいたらまた紹介してほしい」と言われていたこともあり、今回はその言葉に甘えて、例外的に2年連続となる杉橋さんの試験実習をガトーよこはまにお願いすることにしました。そしてガトーよこはまは、1回の実習を受けた上で「十分戦力になる」との判断をし、杉橋さんを正式採用しました。



若き製造部長・小山さん

### 二人の仕事について

製造部長の小山さんは言います。「彼女たちは一般の人と同じですよ。区別するのはおかしい。別に普通に働いてもらっているだけですから」と言います。しかし、小山さんの二人に対する仕事の指示や話し方などには、とても細やかな気配りがあるように思えます。

「それは障害の有無とは関係ないですよ。気配りは人としての基本ですから」そう小山さんは言います。そして二人の仕事については、「教え方やサポートをきちんとすれば、健常者よりよっぽどいい仕事をしてくれます」と言います。

\* \* \* \* \*

齊須さんと杉橋さんは二人ともおとなしく、言葉や感情を表に出すことはあまり得意ではないようです。そのため、取材時にご本人たちからいろいろなお話を伺うことはできませんでした。しかし、従業員の方や学校の教員など身近な人たちから話を聞くと、彼女たちが本当は、いろいろと考えて一生懸命行動していることがよくわかります。

二人の進路指導を担当した教員は言います。「齊須はいつも杉橋の面倒をみようとして一生懸命なやさしい子です。杉橋は『働きたい』という意志をしっかりと持ったまじめな子です。あの二人なら、きっとこの先も一緒に頑張っていけると思っています」。

二人の夢は、いつか自分だけの力で、最高に美味しいケーキを作ることだそうです。



真剣な表情でケーキを切る齊須さん



箱づくりの速度と正確さは誰にも負けない杉橋さん



Office7

(有) AGCサンスマイル

こんどう  
近藤

きょうへい  
恭平さん

平成18年度 日野中央高等特別支援学校（高等養護学校）卒業

業種

建物・独身寮の清掃、緑化等  
※旭硝子（株）の特例子会社

所在地

横浜市鶴見区末広町1-1  
（大阪、愛甲郡にも事業所あり）

従業員数

40名（知的障害者29名/  
管理スタッフ11名）

※H20.4.1現在

(有) AGCサンスマイルは旭硝子株式会社の特例子会社で、2002年の1月に設立されました。主な業務は、親会社の関連施設の清掃などで、29名の知的障害者と11名のスタッフ社員が働いています。

### 近藤さん採用までの経緯

近藤さんはここで2年生の時に1回、3年生の時に3回の実習を行いました。当時から近藤さんと接している業務第一課長の小池勇治さんは、実習を始めたばかりの頃の近藤さんについて、「理解力はもともと高い子でした。でも器具を+使った清掃というのは足の動かし方が意外と難しく、近藤君も最初は体がなかなかついていきませんでした。正直言って彼にはこの仕事は向いていないかな？と思ったこともありましたが」と言います。

そんなある日、休憩時間に小池さんが職場の隅に目をやると、一人で黙々と足の動かし方を練習している近藤さんの姿が目に入ったそうです。それを見てはじめて小池さんは、「この子ならやっつけられる」と確信したそうです。

また近藤さんは実習のたびに、だれに言われたわけでもなく、「今回は〇〇をやりたい」、「今回は□□を覚えたい」といった自分なりのテーマを決めて来たそうです。「そんなことをする実習生は、後にも先にも近藤くんだけでした」と小池さんは笑います。

こうした前向きな姿勢や努力が実習を通して周りに理解され、近藤さんは2007年4月に正式採用となりました。



開発センター内を清掃する近藤さん

### プロとして

小池さんは、近藤さんはもちろん、ここで働く社員全員を「障害者だと思って接してはいない」と言います。社員の中には、「私はこの仕事は好きではありません。でも、もらったお金で好きなコンサートに行けるので、この仕事を続けます」と、はっきり言う方もいるそうです。

しかし小池さんはこの考えを否定しません。そして言います。「仕事に対する意義や意欲は人それぞれです。大切なのはプロとしての自覚です。プロとして仕事をするからお金が貰え自己欲求を満たすことができる。だからこそ働くことの価値は重い。社員たちには、そのことをいつも忘れないでいてほしいと思っています」。

### 企業としてのAGCサンスマイル

AGCサンスマイルの業績について取締役社長の山下雅夫さんは、「当社が黒字になったことは一度もありません。親会社の支援がなければとてもやっていけません」と言います。そして機会あるごとに親会社に対して、「赤字だからと言って潰すわけにはいきませんよ！」と言い続けているそうです。

しかし本当は、採算を度外視して社会的責任を果たそうとしている親会社の真摯な姿勢を、山下さんも十分知っています。そして平成20年4月には、大阪と愛甲郡にAGCサンスマイルの新たな事業所もできたそうです。

\* \* \* \* \*

今回の取材は近藤さんの母校の担任だった増田先生も同行し、記念撮影をしました。その日の夜、めったに連絡を寄こさない近藤さんから、先生の携帯にメールが届いたそうです。そこには取材に対する感謝の言葉の他に、「写真を写すとき先生が照れていたのが面白かったです」と書き添えられていたそうです。



元担任増田先生とツーショット



Office8 <http://www.apita-nagatsuta.com>

**アピタ長津田店 (ユニー(株))**

たなか じゅん  
**田中 純 さん**

平成18年度 日野中央高等特別支援学校 (高等養護学校) 卒業

**業種** ショッピングセンター  
**所在地** 横浜市緑区長津田みなみ台4-7-1  
**従業員数** 約350名  
**障害者雇用状況** 1名

アピタ長津田店は駐車場台数1,500台を誇る郊外型の大規模スーパーマーケットです。田中さんはここで主に、ドライ食品の品だしや店舗での商品整理・接客の業務を行っています。

### 田中さん採用までの経緯

田中さん採用のきっかけは、二つ橋高等特別支援学校(当時:高等養護学校二つ橋分教室)からの職場実習依頼の電話でした。アピタは、グループ全体としてはすでに法定雇用率を達成してはいましたが、副店長の井高真木さんの判断で実習を受け入れることにしたそうです。井高さんはそのときのことを振り返って言います。「障害の有無は考えず、『人』を見たいと思い実習を受け入れました。障害があろうとなかろうと、働くのは『人』ですから」。

田中さんはこのお店で、平成18年7月以降時期を分けて計3回の実習を行い、その天性の明るさとまじめさが評価され、平成19年4月に正式採用となりました。



先輩スタッフと一緒に商品整理

田中さんは『パートナー社員』として採用され、時給や勤務条件は他のパートタイマーの職員と全く同じとなっています。

井高さんは言います。「アピタでは、障害の有無によって条件を変えることは考えてはいません」。

### 職場での田中さん

今回の取材では、写真撮影のためバックヤードや店内で働く田中さんに密着しましたが、すれ違うたびに他の従業員たちと声をかけ合ったりハイタッチしている様子を見ると、田中さんがとても明るく、周囲の方たちとも本当に仲がいいということがわかります。

田中さんは仕事について、「お客様に喜んでもらえることが一番うれしいし、力が湧いてきます」と言います。このように語る田中さんは、『周囲の人から与えられることの大切さ』、『周囲の人に与えることの大切さ』といったことをきちんと理解して、そして実践して働いているように思えます。

田中さんは目下の目標について、「お客様の質問に対して、店内のどんなことを聞かれても答えられるエキスパートになりたいです」と言います。そして将来の夢はアピタの社長になることだそうです。

田中さんの今後について、井高さんは言います。「今のまま、明るくまっすぐなままいて欲しいですね。そして無理なく安全に長く働いて欲しいです」。

\* \* \* \* \*

高等特別支援学校では、進路指導担当教員が定期的に卒業生の職場を訪問する「職場定着支援」を行っています。田中さんの場合は、仕事も人間関係も非常に良好であり学校も安心しているのか、ほとんど支援に来ないそうです。

田中さんは言います。「でも、大森先生はよく休みの日に買い物に来てますよ」。大森先生というのは二つ橋高等特別支援学校の進路担当の教員です。

ちなみに大森先生は、アピタ長津田店のある緑区とはまったく逆方向の港南区に住んでいます。



広大なアピタ長津田店の外観



副店長の井高さんと

**(福) 久遠園 第二福澤保育センター**こいで きみか  
**小出 季美香さん**

平成17年度 日野中央高等特別支援学校（高等養護学校）卒業

**業種** 保育所  
**所在地** 横浜市港北区篠原町2823  
**従業員数** 56名  
**障害者雇用状況** 1名  
（法人全体では3名。3園で知的障害者1名ずつ雇用）

第二福澤保育センターは、新横浜から徒歩十分程度の閑静な場所にある保育園です。小出さんはここで保育補助の仕事をしています。

**小出さん採用までの経緯**

社会福祉法人久遠園は、第二福澤保育センターをはじめ横浜市内で3カ所の保育所を運営していますが、かねてから各施設において障害のある生徒の「体験実習」の受け入れを積極的に進めてきたそうです。「体験実習」というのは就職を前提とする「試験実習」とは異なり、働く場を体験することのみを目的とした実習のことです。小出さんの場合も、第二福澤保育センターとの最初の出会いは、3年生前期の体験実習でした。

もともと子ども好きだった小出さんはここでの体験実習を非常に有意義に過ごし、卒業後も継続して働くことを強く希望するようになったそうです。

園としては、知的障害のある人を職員として採用した前例はなく、内部でかなりの検討を行ったそうですが、実習を通じて把握した小出さんの能力や努力・性格などを評価し、最終的に採用を決めたそうです。

**小出さんのしごと**

小出さんは、園児が使用するさまざまな物品・食べ物の準備や片づけ、部屋の清掃などといった雑務をこなす一方、保育補助の仕事も行っています。



園児にやさしく語りかける小出さん

現在小出さんは2歳児ほし組を担当しており、毎日園児たちと一緒に遊んだり散歩に行ったりしています。

小出さんについて、施設長の山口操さんは言います。「まじめで、与えられた仕事に対してはとても真剣に取り組んでくれます。ハキハキとものを言うタイプではありませんが、ゆったり・のんびりした性格や話し方が子どものテンポと合っていて、ごく自然にうち解けています」。

今回の取材時も、園児が自然に寄っていき、園児と同じ目線で接する小出さんの姿がとても印象的でした。

\* \* \* \* \*

園長の山口さんは言います。「この園ではかなり重い障害児も受け入れて、健常児といっしょに保育をしています。そのような環境の中では、歩けなかった子が徐々に歩けるようになったり、しゃべれなかった子が徐々にしゃべれるようになったりすることが、しばしばおこります。やはり、大勢の人の中で時間を共有しながら過ごすことは、人の成長にとってとても大切なことなのではないかと思えます」。

小出さんがこの園に就職してから3年目を迎えました。「園で働きはじめて一番うれしかったことは？」という質問に対して小出さんは、少し照れながら、「子どもが自分の名前を呼んでくれたことです」と言います。

今小出さんは園児から、「小出先生」と呼ばれています。



自然に園児が集まってくる



ワタミダイレクトフランチャイズシステムズ(株)は、和民(株)の外食部門を担うグループ企業のひとつです。

社屋は京急羽田線の大鳥居駅と連絡通路で直接つながっています。

藤田さんは、この会社の総務部門で主に、北日本・東日本に所在する125店舗からの備品類の発注依頼をパソコンで受注・管理する業務を行っています。

### 企業理念

ワタミダイレクトフランチャイズシステムズ(株)の企業理念について、藤田さんの上司である営業企画課長の織田雅樹さんは言います。「私たちは、企業というのは、『企業市民』としての社会的存在であると考えています。企業は社会の一員としての使命や責任を果たすことにより、その存在・継続性が許されているのだと思います」。

和民と言えば居酒屋というイメージが強いのですが、実は『外食』『環境』『農業』『介護』という4分野のグループ企業で構成されており、それぞれの企業が『企業市民』という理念を具現化していると言えます。ワタミダイレクトフランチャイズシステムズ(株)は、障害者をはじめとした雇用機会の拡大に力を注いでいますが、これもこの企業理念を反映した取組であると言えます。

### 職場での藤田さん

藤田さんは平成19年の1月から3月にかけて実習を行い、その年の4月からここで働いています。

藤田さんのデスクは社長席のすぐ隣、大勢の社員に囲まれた場所にあります。そして多くの人が行き交う場所ということもあり、毎日様々な人と接しながら仕事をしています。

織田さんは藤田さんについて、「うちの会社の中で藤田君のことを障害者だと思っている社員は一人もいませんし、もし今藤田君がいなくなったらみんな困ってしまいます」と言います。毎日多くの人と接しながら、職場で必要とされて働く藤田さんは、「働くことが楽しい」、「毎日が充実している」と言います。

藤田さんがこういう気持ちで働ける背景には、本人の資質や努力はもちろんですが、きちんと藤田さんのことを理解して、一緒に歩んでいこうとする社員のみなさんの『心意気』があるように思えます。

藤田さんは仕事の心構えについて、「人から学ぶこと、人とふれあうことを大切にしたい」と言います。そして将来の夢については、「いつか人のために『何か』をしたい」と言います。

言葉のひとつひとつに「人を大切にしたい」という藤田さんの思いが伝わってきますが、この思いこそ、藤田さんがこの職場で得た一番大切なものであり、まさに職場の『心意気』によって育まれたものなのではないでしょうか。

\* \* \* \* \*

先だって、実習時から10ヶ月間付きっきりで藤田さんの指導に当たった職場の先輩が、別の部署に異動となってしまったそうです。送別会で藤田さんは、周囲には一切内緒でその先輩にボールペンをプレゼントしたそうです。

先輩はそれ以来、そのボールペンを肌身離さず持ち歩いているそうです。



京急大鳥居駅と直結している社屋



真剣にパソコンに向かう藤田さん

Office 1 1	<a href="http://www.starbucks.co.jp">http://www.starbucks.co.jp</a>	<b>業種</b> コーヒーストアの経営/ コーヒー及び関連商品の販売
<b>スターバックスコーヒージャパン(株) 湘南台駅ビル店</b>		<b>所在地</b> 藤沢市湘南台2-15 小田急マルシェ湘南台2
<b>あべ けんたろう 阿部 健太郎さん</b>		<b>障害者雇用状況</b> 全国780店舗で95名 (うち9割が知的障害者)
平成18年度 日野中央高等特別支援学校(高等養護学校)卒業		

スターバックスコーヒー湘南台駅ビル店は、小田急江ノ島線湘南台駅西口のすぐそばにあります。駅前ということもあり、店内はいつも賑わっています。

### 「バリスタ」をめざして

現在スターバックスでは、障害の有無にかかわらず、すべての従業員にドリンク提供や接客のエキスパート(バリスタ)をめざして働いてもらっています。

このことについて本社人事部の鈴木千春さんは言います。「当社で障害者雇用の検討を始めた当初は、障害のある方には、清掃や軽作業といった裏方的業務を中心に行ってもらおうとの考えが主流でした。しかし、『働きやすい職場』と『多様性の尊重』を理念として掲げる当社として、本当にそれで良いのだろうか?障害の有無を問わず、同じ仲間として同じ仕事をしてもらうべきなのではないか?という考えが徐々に大きくなってきました」。



湘南台店の外観

### 手探りでのスタート

このような考えのもとに、「障害の有無にかかわらずすべての従業員がバリスタをめざす」という、スターバックスの障害者雇用のスタイルが生まれました。

当初、この考え方・やり方がうまくいくという自信は正直言って本社にもなかったそうです。また、多くの店舗からは、「なぜあえて店で雇用するのか?まずは本社からではないのか?」、「お客様と接してなにか問題が起きたらどうするのだ?」といった不安や疑問の声があがったそうです。スターバックスの障害者雇用は、このような状況の中、手を挙げてくれたごく少数の店舗からスタートしました。

### スターバックスの人材育成

実際の雇用が始まった際の各店舗での障害者の受け入れは、比較的スムーズだったそうです。鈴木さんはその理由について、「当社では人材育成や接客について統一的なマニュアルは作っていません。一人一人の主体性や個性、ニーズに応じて臨機応変に対応することを重視してきました。店舗の従業員たちは、日常的にそういうコミュニケーション能力を養っていたので、ごく自然に接することができたのではないのでしょうか」。

しかしながら、何もかもすべてがうまくいったわけではありません。生活上のこと、コミュニケーションのことなど、様々な問題が起こったのも事実であり、中には残念ながら退職してしまった方もいるそうです。



スターバックスの定番人気商品

鈴木さんは言います。「企業が障害者を雇用することは、少なからずエネルギーを必要とします。でも、今まで人前で緊張して話すこともできなかった方が、堂々とお客様とお話ししたり、休日にほかの従業員とみんなで旅行に出かけたりする姿を見ると、人との出会いや、仕事を通じて成長することのすばらしさを感じずにはいられません。スターバックスで働くことが、その方の人生にとって有意義な時間であってほしいと願って、これからも障害者雇用を進めていきたいと思っています」。

そして今、スターバックスの障害者雇用は、全国780店舗に広がっています。



## 阿部さんについて

阿部さんは、2回の職場実習を経て2007年4月に入社しました。

明るく笑顔絶やさない阿部さんは、従業員やお客さんからも人気がありますが、本人は、「どちらかというと接客は苦手です」と言います。確かに阿部さんは、接客が「うまい」というのとは異なるように思えます。取材の際も、一つ一つの質問に誠実に答えようとして、返事がなかなか見つからないような印象を受けました。でも実はそういうところが、飾らない阿部さんの本当の魅力なのかもしれません。そしてそのことは、誰よりも周りの従業員がよく知っているようです。

約1年間阿部さんと一緒に仕事をしてきた店長の功刀（くぬぎ）愛さんは言います。「アベケン（店長は阿部さんをこう呼びます）は『ありがとう』という言葉が大好きなんです。だれかに『ありがとう』って言ってもらいたくて、どうしたらそう言ってもらえるか、いつも一生懸命考えているんです」。

そして、「私たちはアベケンから大切なことをいろいろ教わりました。自分もほかの従業員も、彼と出会ってから変わりました。アベケンがこのお店に来てくれて本当に感謝しています」と言います。



\* \* \* \* \*



阿部さんは目下の目標について、「ブラックエプロンを手に入れることです」と言います。

通常、スターバックスの従業員が身につけるエプロンは緑色ですが、コーヒーの幅広い知識・技能を身につけた方だけが、このブラックエプロンを着用することができるのだそうです。大のコーヒー好きの阿部さんは、すでに店舗においてある約20種類のコーヒーの味、原産地、特徴などすべてを覚えたそうですが、ブラックエプロンへの道のりはさらに厳しく、難しい試験をパスした従業員しか、手に入れることはできないそうです。

阿部さんは今、目標に向かって静かに闘志を燃やしています。



**業種** コーヒー・軽食等の製作・販売  
**所在地** 横浜市金沢区泥亀2-14-5  
 (金沢地区センター1階)  
**従業員数** 8名  
 (店長1名/サポート店員4名  
 障害者店員3名)

ふれあいショップ「マーブル」は、金沢区の金沢地区センターの中にある軽食・喫茶のお店です。「ふれあいショップ」というと「福祉就労の場」という印象が強いかもしれませんが、ここマーブルはすべての従業員を一般就労として雇用しています。

石川さんはここで、ドリンクの製造、ウェイター、レジ等、お店のほとんどの業務をこなして働いています。

### 県アビリンピックで金メダル

石川さんは、もともとウェイターの仕事に興味があり、本郷特別支援学校在学時の体験実習も、中区にあるふれあいショップで行ったそうです。その後卒業して、みごとにここマーブルで、憧れだったウェイターの仕事に就くことになりました。しかし石川さんはそれでは飽きたらず、自らの意志で、平成19年度神奈川県アビリンピック喫茶部門に出場、みごと金メダルを獲得したそうです。

今は、10月に開催予定の全国大会に向けて闘志を燃やしているとのこと。

### マーブルでの社員育成

マーブルで、石川さんを含む3名の知的障害者と一緒に働く店長の奥村紀子さんは、障害のある方とともに働くことについて、「一緒に働いていると、時にはこちらがとまどうこともあります。でも壁を作るのは良くない。コミュニケーションが一番大切です」と言います。また、働く上での指導については、「地道に指導していくことが大切だと思います。1度できたことでも、何回も言います。しつこいくらい同じことを言うと、必ずきちんと覚えてくれます」と言います。



レジで接客をする石川さん

### 働くことによって成長

今回の取材の中では石川さんご本人から、アビリンピックに出た理由、仕事の心構え、将来の夢など、いろいろなお話を伺いました。どのお話もきちんとした受け答えで、全くと言っていいほど障害を感じさせませんでした。仕事の動きも非常に機敏で、まさに「好青年」といった印象を受けます。しかし、石川さんが在籍していた本郷特別支援学校は、障害程度が重い児童生徒が多く、一般就労している卒業生は少数となっています。

今回の取材に同行し、久しぶりに石川さんと再会した本郷特別支援学校の進路担当の教諭は言います。

「まじめで優秀な生徒でしたが、学生時代は人と笑顔で話すのが難しかったり、体力面の弱さがあったりと、社会的にきちんと自立できるだろうか？という不安はありました。でも、今日久しぶりに彼を見て、『よくぞここまで成長してくれた！』と、誇らしげな気持ちになりました」。

\* \* \* \* \*

社会の中で働き、自分の役割や居場所を見つけ、周囲から必要とされて生活していくことが、人の成長にとって大切であるということは、障害があってもなくても、きっと同じことだと思います。

石川さんは、社会に出てここマーブルでウェイターという居場所を見つけて、大きく成長していったのではないのでしょうか。

療育手帳上の障害程度は、障害の「重い」、「軽い」を判断するための一つの材料にはなるかもしれませんが、必ずしも人の成長の可能性を判断する材料とはならないのかもしれませんが。



金沢地区センター内「マーブル」の外観



アビリンピックの金メダルを手にする石川さん

Office 13

(株) 本牧館

いしぐろ みどり  
石黒 緑さん

平成18年度 本郷特別支援学校卒業

業種 パン製造・販売

所在地 横浜市中区本牧間門19-28

従業員数 約70名(2店舗計)

障害者雇用状況

知的障害者4名/肢体不自由1名(本店)

本牧館は、本牧通りの広い通り沿いにあるパン屋さんです。店内は広く明るく、車でわざわざ買いに来るお客さんも大勢いて、活気にあふれています。

石黒さんはこのお店の調理場で、主に各調理器の洗浄やパンの袋詰め補助等の仕事をしています。

### 本牧館の障害者雇用

本牧館は、規模的には障害者を雇用する法的義務はありませんが、20年以上前から障害のある方を随時採用し、現在は本店で4名の知的障害者と1名の身体障害者を雇用しています。

しかしこのお店では、「障害者を雇用している」という意識は全くと言っていいほどありません。実際、ごく最近まで、企業が障害者を雇用することによって得られる助成金さえ、受け取っていなかったそうです。

『障害があろうとなかろうと得意なことを伸ばしていく』というのが、このお店のスタイルのようです。

社長の青木光太郎さんは言います。「入社以来20年になるベテランの知的障害者の従業員がいますが、今当店では、彼の腕がないとドーナツは焼けないんです」。



### 職場での石黒さん

石黒さんはなかなかの人気者で、男性の従業員やお客さんから、声をかけられたりデートに誘われたりすることもたびたびあるそうです。本人に感想を聞くと、「そういうのは引いちゃいますね」と今ふうの若者らしい返事が返ってきます。

しかし一方仕事では、周囲の人に非常に気を使う控え目な面があるようです。そして自分のことを、「プレッシャーに弱い」、「緊張するとすぐにテンパって、言葉遣いが変になってしまう」と、マイナス評価をします。

将来の夢は、「人が元気になるような、笑顔が出るようなパンを作りたい」ということだそうですが、それはあくまでも「趣味」としてであり、商売としてお客さんに売ることについては、「無理ですよ」と顔を横に振ります。

社長の青木さんは、「今の仕事はもう自分の力でできるようになったので、今後は店舗に立ってもらっても考えていますが、本人はいまひとつ自信がないようです」と言います。それでも青木さんは無理強いはいしません。本人の意思を尊重し、ゆっくり育てていくのが、本牧館のスタイルのようです。

### いつか自分で…

石黒さんのお母さんは、平成19年に亡くなりました。お通夜には、日頃から家族のように接している従業員の方たちが、みんな来てくれたそうです。

悲しいできごとではありましたが、石黒さんは、いつも変わらず、毎朝早く起きて自分で食事の支度をしてから出勤しているそうです。そして周囲のやさしさに接し、笑顔でいる時間もどんどん増えてきたそうです。

しっかり者で誰からも愛される石黒さんのことから、自信をもって、自分で焼いたパンを、自分で売る日が来るのも、そう遠くはないかもしれません。





# Office 14

## 日清オイリオ・ビジネススタッフ (株)

とよはら ひさし  
**豊原 久志**さん

平成19年度 港南台ひの特別支援学校卒業

**業 種** 日清オイリオグループ横浜磯子  
事業場内建物内外の日常清掃等  
(日清オイリオグループ株式会  
社の特例子会社)

**所在地** 横浜市磯子区新森町1

**従業員数** 16名  
(うち知的障害者11名)

### ビジネススタッフの事務所がある本館棟



日清オイリオ・ビジネススタッフ (株) は、日清オイリオグループ (株) の特例子会社で、広大な日清オイリオグループ横浜磯子事業場の本館棟の中に事務所を構えています。

豊原さんをはじめとする日清オイリオ・ビジネススタッフの社員たちは、この事務所を拠点に、本館棟や食品工場内の様々な部屋の清掃業務を行っています。

### 日清オイリオ・ビジネススタッフの社員育成

日清オイリオ・ビジネススタッフは、障害者の雇用を目的とした特例子会社として、2004年3月に設立されました。

代表取締役の内田さんは、社員を企業の戦力としていくために必要なこととして、(1) 目標を作り実行していくこと。

(2) 個人作業と共同作業を取り入れ、コミュニケーションや助け合うことの大切さを知ってもらうこと。(3) 社員ひとりひとりの個性に個別に対応すること。という3点をあげています。そして、社員に毎日必ず書いてもらう作業日誌を通じて、社員ひとりひとりにこれらのことを確認してもらうとともに、社員の気持ちを把握することに努めているそうです。

日清オイリオ・ビジネススタッフでは、設立以来これらの取組を着実にやってきたこともあり、現在では、障害者を雇用する上での様々なノウハウが蓄積され、円滑に業務を進めることが可能になっているそうです。

また内田さんは、「このような社員育成のスタイルを着実に社員に浸透させるためには、毎日現場で社員と接する指導員の存在が非常に大切です」と言います。現在、日清オイリオ・ビジネススタッフには、母親役となって、社員ひとりひとりの気持ちに寄り添いながら指導に当たる指導員がおり、社員は皆自信をもって豊かな気持ちで仕事に取り組んでいるとのことでした。

### 職場での豊原さん

豊原さんは、初対面などで緊張していると、なかなか言葉が出てこない面があるようです。しかし、本当の豊原さんがとても明るくて快活だと言うことを、豊原さんと接する周りの方たちは、みんな知っています。社長の内田さんは言います。「しかも彼は、すごく優しく、しかも抜群に物覚えがいいんです」。

この会社では、二人一組で清掃業務を行うことが多いようですが、豊原さんは自分の持ち場の清掃を早く終わると、必ず自分から「手伝います!」と言って、相方の手伝いをするそうです。また、日清オイリオ・ビジネススタッフが清掃を請け負っている場所は、会議室、トイレ、食堂、更衣室等多岐に渡り、全部で100カ所を超えていますが、豊原さんはそれらの場所や、それぞれの場所での清掃器具・清掃方法について、すべて記憶をしているそうです。

取材の日、豊原さんは本館棟の男子便所の清掃を行っていましたが、その集中力と機敏な動きには目を見張るものがありました。

\* \* \* \* \*

内田さんは言います。「企業が、社員のやった仕事に対して達成感と誇りを持たせてあげると、彼らは自信を持ちます。するといつの間にか自分の気持ちや考えを表現してくれるようになり、豊かなコミュニケーションがとれるようになります」。

日清オイリオ・ビジネススタッフは、豊原さんの持つ優しさや能力を、見事に開花させているようです。



テキパキと便器を洗浄する豊原さん

# Ⅲ 雇用現場からのメッセージ

## MESSAGE 1

<http://www.fancl.co.jp/smile/top.html>

### (株)ファンケルスマイル

会長 浅井 輝生さん/指導員 長瀬 誠さん

株式会社ファンケルスマイルは、株式会社ファンケルの特例子会社で、平成11年2月に設立されました。障害のある社員37名（うち重度18名）、指導員4名、管理者5名の職場です。

主な業務には、親会社のダイレクトメールの封入・封緘・発送作業や、商品の梱包・出荷作業、コ



ファンケルスマイルの作業室内

ピーサービス、社屋内外の清掃作業などがあります。

ここで働く平野邦子さんには、重度（A2）の知的障害が

あります。今回は、この平野さんを戦力として雇用している元社長（現会長）の浅井輝生さんと、指導員の長瀬誠さんにお話をお聞きしました。

### 平野さん採用の経緯

平野さんはファンケルスマイルの設立に先立つ平成10年9月、親会社にて採用されました。当時の平野さんの仕事は、毎日単純作業の繰り返しで、ほかの社員とのコミュニケーションもほとんどなかったそうです。

平野さんはその後、ファンケルスマイルの設立と同時に、親会社からファンケルスマイルに異動してきました。その頃の平野さんについて、浅井さんは言います。「発する言葉は独り言ばかりで、時々トイレの便器にトイレットペーパーを大量に詰め込むなどという行為が見られました」。

浅井さんはこういう行為は、単純作業と孤独によるストレスが大きな原因であると考え、社内で平野さんとうまくコミュニケーションをとるよう努めたそうですが、なかなかうまく行かない日々が続いたそうです。

### きっかけ

平成12年のある日、指導員の長瀬さんは、平野さんがきちんとした文章を書けることに気づきました。長瀬さんは、「文章によるコミュニケーションならうまく行くかもしれない」と思い、平野さんとの交換日誌を始めたそうです。予想は的中し、日誌を通じて言葉では難しかった豊かなコミュニケーションが図れたそうです。そしてこの日誌は約2年間続きました。

この交換日誌をきっかけに、徐々に平野さんの独り言は減り、ある程度の会話も可能になり、与えられた仕事をきっちりとこなすようになっていったそうです。そして段々と職場の人気者になっていったそうです。

浅井さんは言います。「コミュニケーションをとること、誉めてあげること、評価してあげることというのは、人の成長にとってとても大切なことだと思います。彼女が変わったきっかけも、そこにあるのだと思っています」。

### 平野さんの今

平野さんはもともと漢字をよく知っており、数字の計算能力も非常に高いそうです。また、人並みはずれた記憶力を持っており、一度聞いた人の名前と生年月日は二度と忘れないという特技を持っているそうです。

このような能力が見込まれ、いま平野さんは、ファンケルスマイル内での作業の傍ら、隣接する旧本社ビル1階の売店に立ち、接客やレジ打ちの業務をしています。

お客さんとのきちんとした会話は困難ですが、驚異の記憶力を披露するなどで、かなりの人気者になっているそうです。



浅井さんと平野さん

\* \* \* \* \*

浅井さんは言います。「どんな子にもできることはあります。企業が見極める努力をすれば、その子を生かしていくことが、必ずできると思っています」。



<http://www.fsk-inc.co.jp/>

## 富士ソフト企画(株)

### 元社長・前取締役相談役 早津宗彦さん

富士ソフト企画(株)は、ソフトウェア企業である富士ソフト(株)の子会社で、平成12年に特例子会社の認定を受けました。



現在169人の社員のうち123人が障害者で、その内訳は、身体障害51人、精神障害51人、知的障害21人となっています。

業務としては、名刺作成、データ入力、ホームページ作成といった情報サービスの他、損保の代理店業務、本社ビル等の管理なども手がけています。

### 富士ソフト企画(株)設立の経緯

富士ソフト企画(株)は平成3年に設立された会社ですが、早津さんが社長として着任した平成12年、特例子会社として生まれ変わりました。



特例子会社設立時は、身体障害者3名のみでのスタートで仕事もなく、初代社長の早津さんは、どうしたらうまく会社

を軌道に乗せられるか悩んだ時期もあったそうです。

早津さんは、仕事をもらうために本社の様々な部署に頭を下げて回りましたが、その結果徐々に仕事ができるようになっていきました。

早津さんはその頃を振り返って言います。「当時採用したのは身体障害者の方だけでした。知的障害者の方の実習依頼・雇用依頼もたくさんあったのですが、私自身が知的障害者とどのように接すればよいかわからず、断り続けていたんです」。

### 知的障害者の受け入れ

そんな早津さんのイメージを変えたのは、横浜市西部就労支援センターから迎えたひとりの実習生だったと言います。「パソコンが得意な実習希望者がいるのでぜひ」というセンターからの熱心なアプローチに対し、早津さんは、「実習だけなら」ということで、はじめて知的障害者を受け入れたそうです。そしてそれが、早津さんの知的障害者に対する見方

を180度変えるきっかけになったそうです。

人並み以上にまじめで、パソコンの操作にも長けているその実習生と接して早津さんは、自分が今までどれだけ偏見に満ちた目で知的障害者を見てきたかということに気づかされたそうです。そして、「知的障害者は十分戦力になる」と思ったそうです。

### 名刺やwebページの作成も

こうしたできごとを経て、富士ソフト企画(株)では、平成13年から知的障害者の雇用を積極的に進めるようになりました。

現在富士ソフト企画(株)では、多くの知的障害者のある社員が、名刺やwebページの作成等、パソコン



を駆使した業務に携わっていますが、雇用を始めた当初はほかの社員から、「無理ではないか?」という反対の声も出た

そうです。しかし早津さんはそれを制して、知的障害のある社員にさまざまなチャレンジをさせるようにしました。

早津さんは言います。「彼らはやればできます。最初から無理だと決めつけていては何も始まらない」。

富士ソフト企画(株)には肢体不自由や精神障害のある社員も多く働いていますが、そういう周囲の社員が指導したり相談にのったりすることにより、知的障害のある社員のパソコンのスキルは、めざましく伸びていくそうです。

入社前は全くパソコンを使えなかったのに、今ではwebページの作成もできるようになった社員もいるとのこと。

この職場で彼らは、生き生きと輝いて見えます。

\* \* \* \* \*

過去を振り返って早津さんは言います。「私は障害者雇用に対して崇高な思想は全く持っていませんでした。彼らには、当社の戦力として働いてもらえばそれでよかったんです」。

そんなクールな企業人だった早津さんは今、地元相模原市で、障害者の働く場を広げるためのNPO法人設立に向けて飛び回っています。









ココが働クハシヨ!

平成 2 1 年 2 月 発行

編集・発行 横浜市教育委員会事務局特別支援教育課  
〒231-0017 横浜市中区港町1-1  
電話045(671)3958 FAX045(663)1831